
人形師の夢語り

中富寺 震

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形師の夢語り

【Zコード】

N3142Q

【作者名】

中宮寺 淳

【あらすじ】

ある人形師の長い夢。語り継がれる病。青年の最後の希望。おびただしい数のビスクドール。幼い少女の戯れ。嘘をつきながら、ふわりふわりと夢の中をさまよい続けることは、はたして幸せなのだろうか。

風の鳴る音がする。冷たくて物悲しい音色を奏でながら、莊厳な城は霞んでいく。黒々とそびえ立つ邪悪な城、下界でざわめく深い森の鼓動、そして、大空に圧倒的な存在感を放つ月。空高くに昇つた巨大な月は、神聖な輝きを放ちながら静かに下界を見下ろしている。太陽のような暖かさはなく、ただひたすらに冷酷な輝きに世界が彩られていく。肌を刺すような冷たさに反して、徐々に熱をおびていく体。体内で何かが弾けたように胸の奥から込み上げてくる熱は、熱い雲となつて瞳からこぼれ落ちる。ゆらゆらと揺らめく視界、冷え切つた空氣に捕われてしごりていく四肢。まるで五感を失つたかのように、人形のように、動くことができない。

高くそびえ立つこの城の屋上から見上げる月がこんなにも大きいなんて、知らなかつた。煌めく夜空が、こんなにも感傷的にさせるなんて知らなかつた。薄れしていく記憶の中で唯一思い出すオルゴールのメロディーが頭の中で繰り返しながらしていく。限界まで張つた緊張の糸が、世界をよりいつそう美しく見せるのだろうか。どこまでも澄んだ空氣に、冷たい光を降り注ぐ月。ざわざわと鳴る木々に、鳥が羽ばたく微かな音。耳を澄ませばすべて流れこんでくる、命あるものの鼓動が、ひどく新鮮に思えた。

「トライヴイス……」

囁くように名を呼ぶのは、いつたい誰だろつ。脳に響く脈動に混じつたその声は、何よりも無機質に響く。

「…ミユリエルつ…！」

ああ、思い出した。腕の中で静かに眠る君の名を。月光に輝く金の髪に、大きな硝子の瞳。きめ細かな白い肌に、熟れた林檎のよう

な類。

「……ミコリエル……」

名を呼んでも、君は田を覚まさなかつた。しつとつと濡れた瞳に優しくキスをしてから、薔薇色の唇に触れた。

「……あ、そうだつたね」

指先がぶつかつた彼女の唇は、ひどく冷たい。

ゆつくじと記憶を旅しながら、眠ってしまった彼女と同じように瞳を閉じた。穏やかに流れる時間の中で、暗くなつた視界は心地よい。

「おやすみ、ミコリエル」

もう一度そつと囁いて、腕の中の君を抱きしめた。衣擦れの音がじんわりと溶け込んで、頬に触れる金糸からは懐かしい香りがする。

神様、どうか、

微かに開けた視界に残るのは、無数の輝き。

彼女が永遠に、幸せでありますように。

ほんの少しだけ笑つて、そして青年は穏やかに瞳を閉じる。もう誰も、彼等を壊すことなどできなかつた。

真っ白なシーツに深紅のベッドカバー。金で刺繡された枕に天蓋。レースのカーテンに隠された彼女の世界は、彼女を隠す大きな薔薇のよう。

「ミコリエル」

甘い声で囁くように、ベッドで体を丸める少女を揺り起こす。薄い桃色のネグリジェに包まれた白い肌は絹のようにすべらかで、シーツに広がる豊かな金の髪はくるくると遊び、小さな手はやわらかく握られている。穏やかな寝息を立てていた少女は、少しだけ眉を寄せてからゆづくりと目を開けた。

「おはよう、ミコリエル」

少女の視界に入ったことを確認すると、青年は優しく微笑んだ。

「今朝はワツフルだよ。」

「…いちごは…？」

「もちろんあるさ。」

少女は微笑むと、むくりと起き上がってのびをした。蜂蜜色の瞳が徐々に輝きはじめる。青年はアンティークなクローゼットから桃色のエプロンドレスを取り出すと、少女の着替えを手伝いはじめた。

「ねえ、トラヴィス

「ん？」

「わたし、ここが好きよ」

優しくリボンを結んでやつていると、少女はぽつりとそう呟いた。何度も繰り返された言葉に、青年はいつも通りに笑みを浮かべる。青年はそつと少女の頭をなでると、着替えがすんだ彼女を抱えてドレッサーの前に座らせた。大きな鏡には美しい少女と、そつと少女の肩を抱く青年の姿。引き出しから櫛と桃色のリボンを取り出

して、少女の柔らかな金髪を整える。

「今日は、何をするの？」

「新しい布が届いたからね、クララのドレスを作ろうつか」

「刺繡は、わたしにやらせてね」

「もちろんさ」

鏡ごしに微笑みあうと、青年は少女の髪をしつかり結う。ハーフアップにされた髪に、美しいリボンがよく映えていた。

エイヴォリー城は、街の奥深くの森の中にひっそりと建っている。迷路のように入り組んだ森を抜けた先にある巨大な鉄製の門は、来るものをどこか拒んでるかのように堅く閉ざされていた。先祖代々エイヴォリー家に受け継がれてきたこの城は、その昔小さな人形師であつた先人が莫大な資金を投資して作らせた本格的な豪邸で、街の者は皆エイヴォリー城と呼んでいた。祖父から父へ、父から子へ。徐々に受け継がれていくエイヴォリー家の人形師としての血は、しかし青年トラヴィスの師であるオズウェル・エイヴォリーによって突如途絶えることになる。精巧な人形作りで有名だった彼には子供がいなかつた。それどころか、結婚すらしていなかつたのだ。そのため、天涯孤独だった彼は、両親を亡くしていった少年を引き取つた。しかし彼は、少年に人形作りを教えなかつた。普通の街の青年として生活させ、自由を与えた。オズウェルが病死すると、とうとう人形師の血は途絶えてしまう。城には夥しい数の人形が残され、広すぎる空間は彼一人のものとなる。

そこまでは、話してくれた。

少女は目の前で深い青の布にレースを付ける青年をぼんやりと見つめながら思う。残された人形達にこうして様々なドレスを作りながら、二人は穏やかに日々を過ごしていた。少女がこの城にきてから、すでに一ヶ月がたつている。

もう、わたしはどこへもいかないのに。

ミュリエルは知っていた。トラヴィスが嘘をつきつづけているこ

とを。焦げたキャラメル色の髪に、ひすいの瞳を持つ優しい彼は、自分のことはあまり語らない。何故ここに連れられたのか、何故このような穏やかな時間を生きるのか 大切に大切に、箱庭で生きてきた幼い少女には疑うことなど思いもよらないことなのだ。嘘を紡ぐ唇は甘く優しい。だからこそ、彼女はこの生活を否定できない。トライヴィスはミコリエルを叱らない。蕩けるように甘やかし、暖かく満たす。退屈などない。完全なまでに満たされた世界で、それを否定するのはトライヴィスを裏切る行為のような気がした。このまま騙されたまま、甘い嘘の中で生きつづけようか。やらやらとただよいながら、退屈など存在しない黄金卿で彼と夢を見つづける。不満などなかつた。ただ疑問だつただけだ。けれどミコリエルは、自分が疑問に思うことでトライヴィスが傷つくのだと知っていた。外の世界を尋ねると、彼は苦しそうに無理矢理笑つたのだ。

ミコリエル、頼むから何も聞かないで。僕に、もう少しだけ夢を見させてくれ。

力強く抱きしめた彼の唇が震えているのを、ミコリエルはぼんやりとした思考の中で確かに記憶した。この永遠すら感じることのできる世界を唯一壊すことができるのは、もはや自分しかいないのだと確信していた。だからこそ。

このままわたしに嘘をつきづけて。

騙されたまま、砂糖に溶かされていくように沈みこみたい。彼を壊す唯一の武器を持った少女は、今日も甘く甘く囁く。

「わたしは、ここがすきよ」

優しく笑つて髪を梳く青年に、少女は可憐に笑いかけた。恐れをしらぬ、純粹無垢な笑顔は青年を麻痺させていく。疑問を持つことすら忘れ、ひたすらに人形遊びに興じる毎日は、彼等を現実世界から引き離していく。外界から隔離されたこの城で、一人だけの世界を構築していく幸福。夢だと、嘘だと知りながらも。彼等は、甘い密室から出ようとしない。

二人だけの城で、互いに溺れしていく。

一面に飾られた様々な人形の瞳は、共通して硝子玉。青年を囲うこの世界は堅く閉ざされ人形に護られる。彼等の思いは、人間のそれより重い。

ただ真っ直ぐにこちらを見つめるその蜂蜜色の瞳に、一瞬にして魅せられた。何もかもを失った青年にとつて、彼女こそ希望。希望であり、核心でもある。彼女の存在が彼を癒し、彼女の言葉が彼を傷つける。ひどく矛盾していながらも、最も気高い存在。

「わたしは、ここがすき」

とろけるような声色で紡がれる言葉は青年の脳をますます麻痺させる。知つてか知らずか、少女は同じことを繰り返す。ひたすらに人形と戯れる毎日に疑問を感じながらも、少女が同じことを聞くことはもうなかつた。甘受しようとしたのか、それとも諦めたのかいずれにせよ、青年にとつてそれは好都合でもあり不都合でもあつた。青年の矛盾した世界の中心にいるのは少女。少女こそが、彼の崇拜対象だった。

「ミユリエル、じつちへおいで」

そつと囁くと、無垢な笑顔で頬を胸に擦り寄せた。小さな腕はしつかりと背中に回され、青年は優しく抱きしめ返す。

「トイライス、」

少女がこの城に住むようになつて、もうどれだけの時間を共有したのだろう。共通した思い出は、ただ静かに食事をし、人形と戯れ、そして話をして深く眠ること。単調でいて少しずつ彩の違う毎日は彼等を飽きさせることはない。けれど。

「今度は、どの子にドレスをプレゼントしようつか?」

「ティアナがいいわ。彼女、婚礼のドレスしかもつていなければ、いつ終わるかわからない永遠の幸福ほど、人を不安にさせるものはない。孤独だった青年に幸福を与えた少女は、しつとりと濡れた唇で終わりを誤魔化す。あの日から彼女が箱庭の外の話をすることがない。愛の言葉を語ることなど決してないけれど、青年は彼女と生活を共にしていることがどうしようもなく幸福であり、同時に毎晩彼女の姿が腕の中から消えることを心配していた。互いに先の話はしなかつた。まぎれもなく、彼等の不安定な生活は、常に終わりとの狭間で彷徨っていたのだ。

いつものようにミュリエルを寝かしつけた後、トラヴィスは人形の部屋に来ていた。大きな部屋の窓には重たいカーテンが引かれており、ランプに火を入れると生まれた影が部屋中をうごめく。部屋中に置かれた木製の棚に並べられた、人形、人形、人形。腕に抱けるほどの大ささの人形たちが、同様に無機質な硝子玉を一斉に青年に注ぐ。笑った顔、泣いた顔、困った顔……様々な表情の人形が作り出すこの異質の空間は、色彩に溢れていた。

「さあティアナ、君の採寸をしなくちゃならない。おいで」

語りかけながら、迷うことなくある人形の元へ進んでいく。トラヴィスが目指す先、左の一番奥の棚、三段目の右から一番目にひつそりと飾られた女性の人形は、純白に輝くウエディングドレスを纏っていた。青い瞳は何も語らず、けれど青年は愛おしそうに髪をなでる。中央に設えてある大きな机に彼女を乗せ、引き出しから様々な道具を取り出した。

「君はいったい、誰と結婚しようとしたんだろうね」

語りかけるも、彼女が答えることはない。

「さて。ミュリエルは君にドレスをと言つてくれたよ。何色がいいかな？」

羊皮紙にさらさらと図案を書き込んでいきながら、トラヴィスは歌うように語り続ける。

「綺麗な瞳だ……その青に映えるように、空色のドレスを作りつ。銀の糸で刺繡をして、リボンを飾るんだ。素敵じゃないか」

彼女の髪をくるくると弄びながら、まるで夢の中にいるかのように幸福そうな顔をして、孤独だった青年は夢想する。

いつまでも続く樂園を護ろう。彼女と、僕と、彼女たち。この世界は誰にも壊すことができない秘密の園なんだ。誰の進入も許してはならない。そうだろう?

彼の世界、彼の腕の中に広がる無限。消えることのない記憶を作るために、今夜もトラヴィスは歌うように人形たちと語る。それは深夜の秘密。真夜中におもちゃたちがお茶会を開くのと違つて、ひどく孤独だけれど、それでも彼は幸せだった。優しく抱きしめながら、一体一体に声をかける。そつして彼の夜はふけていく。

「素敵ね」

あれから数日たつて。空色のドレスを満足そうに調整ながら、ミユリエルはころころと笑つた。ベッドの上。トラヴィスの腕の中は優しく暖かで、安心感で満ちている。

「明日のお茶の時間には、彼女も参加させてあげましょうよ」甘い声でねだる少女の髪をなでながら、トラヴィスは優しくうなずいた。寝る前に飲む甘いミルクティーのおかげか、今夜もこの部屋は幸福色に染まっている。

「今日はもういいの?」

部屋を出て行かないトラヴィスに、ミユリエルはそつと囁く。薄桃色の唇を寄せて、彼女の指先がそつと彼の髪を弄ぶ。

「久しぶりに、君とゆっくりおしゃべりしようと思つたんだ」

眠気を誘う甘い声。ミユリエルはくすくすと笑つた。

「わたし、今日はとつても眠たいわ。また明日にしまじょつよ

「それは残念だ」

「でも、今夜はどこにもいかないでね? 一緒にいて頂戴」

日に日に増していく彼女の依存症に、トライヴィスは穏やかに笑いながらも終わりを感じていた。こんなにも幸福になってしまっていいのか。この無限の夢の終わりは、きっと彼女が連れてくる。そんな確信のない不安に駆られながら、それを誤魔化すかのように、青年はゆっくりと瞳を閉じた。

長く暗い廊下にひつそりと佇み、聞きたくもない事実を盗み聞きすることがいかに虚しいか、彼女はよく知っていた。それでも繰り返し同じ毎日を生きるのは、たつた一つの愛を信じたから。今日も彼女は、揺らめく蠟燭の影に踊る。

彼女　この豪邸のたつた一人の女中、ヴィオレーヌは、燭台を握る手がじつとりと汗ばむのを感じて目を伏せた。重たい扉の隙間から密かに“客人”の部屋を覗き込み、彼らの会話を盗み聞きながら苦痛に顔を歪める。憎らしいわけでもない、悲しいわけでもない。ただただ、切なかつた。

ヴィオレーヌがこの城で働きはじめたのは、母の面影をたどつたことが要因だつた。ヴィオレーヌの母は昔、ここで女中として働いていた。貧しい家を助けるため、二度と家に帰れないという無茶な条件を飲んでまで、彼女はヴィオレーヌを守つた。船乗りの夫の訃報を聞いても帰ることは許されず、ただ娘を案じて働く日々。平穏などなかつたのだろうか、彼女は数年後、夫の後を追うように亡くなつた。いつの日か手紙で母の死を知らされてから、ヴィオレーヌは様々な職を転々とし、それでも孤独となつた彼女は、最後に母の職場を訪ねることになる。

古びた屋敷にいたのは、彼女と同じくらいの年の青年と、枯れた老人だけだつた。ひつそりとした城の中で青年の世話係ができたと老人は喜ぶ半面、どうしようもなく苦しそうなときもあつた。そして彼は枕元に彼女を呼び、こう言つうのだ。

いいかい、何があつても、君は自分の気持ちを外に出してはいけないよ。

オズウェル氏の乾燥した指先が必死に自分の指先に絡み、深い青の瞳でまっすぐに見つめてくると、ヴィオーレーヌも必死に頷くのだ。

そう、人形のように、偽ることを学びなさい。

それから彼女は、ただ言われたとおりに動く人形になつた。決められたように炊事洗濯掃除をし、人形たちの手入れをし、老人の介護をし、青年の世話をする。つらくなつたとき、自分を殺せなくなつたときは、こつそりと人形の部屋で泣いた。彼女のお気に入りの人形に話かけながら、そこで一晩過ごせば、すうつと楽になつたのだ。それこそが救い、それこそが原動力だった。

けれど。

あの日から、すべてが変わってしまった。

「ヴィオーレーヌ」

病に伏せついていたオズウェルは、とうとう天国へと召されていった。さらにさびしくなつた城を、それでもいつも通り掃除していた時のこと。彼女は青年に呼び止められる。

「もう、いいから。ちょっと僕に付き合ってくれないか」「困つたように笑う彼に、能面のように無表情の彼女はす、とうなずくと、静かに従つた。

青年　　トラヴィスの部屋に案内されると、彼は泣きそうな顔で笑つたのだ。それはあまりにも、悲痛で、痛々しかつた。

「ヴィオーレーヌ、今までほんとうにありがとう。父さんのために、僕のために、こんなにも必死に働いてくれた。文句ひとつ言わずに、長い間ついてきてくれた。感謝してもしきれないんだ」

ヴィオーレーヌの頬が、ぴくりと動く。硝子のような瞳でじっとトラヴィスを見返すと、彼はやはり、困つたように笑う。

「でも君は、一度だつて心から笑つてくれたことはない。僕はそれが心残りなんだ。もし、もし君が良いのなら、このままここに残つてくれないだろうか。ずっと僕と一緒に、この城を守つてはくれないだらうか。」

トラヴィイスの大きな手がそつとヴィオレーヌの髪に触れる。深い栗色の柔らかな髪を梳きながら、あやすようにゆっくりと語った。深く甘い声で、深淵へと誘うかのように。夕闇に熱くなる頬、指先から伝わる体温。それらすべてが、一気に彼女に流れ込んでいく。

「もう、疲れただろう。」

その一言で。

ヴィオレーヌの心で眠っていた扉が、ゆっくりと開いた。

父と母を亡くした悲しみ。ひたすら毎日を食いつぶし、自分を押し殺して淡々と生きた日々。一切の欲望、願望を立ち、煌びやかなドレスを纏つた人形に嫉妬を覚えることなく。それは年頃の娘にとって、地獄と同じだったはずだ。同じリズムで優しく頭をなでるトラヴィイスの胸で、ヴィオレーヌはひたすら泣いた。声を上げて、すがりつくようにして泣いた。

その日から。一人の同居が始まる。いつものようにヴィオレーヌは女中として同じ仕事をしていたが、一緒に食事をし、人形の手入れをする日々は幸せだった。

そして彼女が彼に恋心を抱くまでに、そう時間はかからなかつた。想いを殺すことを忘れた彼女は、再び苦しむことになる。彼に悟られぬよう、葛藤しながら日常を刻む。悩みながら、それでも彼との時間を幸せに感じて、自分ではどうしようもないほどに気持ちが溢れそうなとき。

彼が、少女を連れてきた。

「ヴィオレーヌ、今日はアウフラウフにしてくれないかな」
楽しそうな彼の声にひっそりとうなずき、買い物かごを持って町に出た。少女が来てからというもの、ヴィオレーヌはまた、あの能面のような表情で過ごすようになった。彼に悟らせないため、自分を殺すため。ぐらぐらと揺れる少女への純粋な嫉妬心。醜い己を、信じたくなかった。

トラヴィスの柔らかな笑みが、優しい大きな手が、慈愛に満ちた瞳が、すべてあの少女に捧げられている。耐えられなかつた。彼女が来る前は自分に向けられていたすべてが、一瞬にして消えていく虚しさ。葛藤とともに毎日が過ぎる。胸をかきむしりたくなりながら、平静を装つて笑うことがどれだけ苦しいかを知つた彼女は、笑うことを見つめだ。

町に出ると、何やらいつもより騒がしかつた。明るい喧噪ではない。焦つたような、時を急ぐ人々のざわめき。不思議に思いながらも、店へ向かう。

と、そのとき。

「ヴィオレー、だな」

ふいに、肩をつかまれた。

「わたしは、何も知りません」

肩をつかまれ、半ば強引に町はずれまで連れてこられた彼女が目にしたのは、大勢の男性、そして、以前に見たことのある男の姿。金髪を風に靡かせ、水色の瞳を怒りで染め上げながら、彼は静かに問つた。“妹はどこだ”と。ヴィオレーは、顔色を変えず、知らぬと答えた。男の瞳は、疑惑で濁る。

「お前たち、下がつて良い。俺だけで話をつける。」

よく通るテノールにまつ毛を震わせながら、恐怖を胸にしまいこんだ。彼に接触してはいけない気がした。彼に触れてしまえば、すべて溢れてしまう、そんな気がした。

「さて、ヴィオレー、手荒な真似をしてすまなかつた。話を聞きたい」

男の声には、言い知れぬ不安と怒りが混じつていて。

「僕はクロード。クロード・ボーマルシエ。トラヴィス・エイヴォリーの友人だ」

ああそうだ、この男が、

「君は、彼の家で働いているね？」

「彼を、変えてしまったのか。

「端的に言おう。僕の妹が、ミコリエルが、トラヴィスと接触したきり姿を消した。何があつたか知らないか」

ミコリエル・ボーマルシェが姿を消して一ヶ月。あらゆる場所を探しつくしたが一向に戻つてくる気配がない。あと探していないのはエイヴォリー城だけだが連絡を取ろうにもトラヴィスは一年も音沙汰なしで町にもでてこない。家を訪ねてもひつそりと静まり返っているだけ。このままではらちが明かない。話を聞かせてくれクロードの話を要約すると、そのような内容だった。ヴィオレーヌは、ゆっくりと息を吐き出す。

「わたしは、何も知りません」

クロードの瞳が苛立ちを帯びる。彼はふと笑うと、ヴィオーレヌの耳元に唇を寄せた。

「君は、今幸せかい」

「どうりと、心臓が鳴る。

「ただひたすらに毎日を食いつぶして、感情を殺して生きるのはそんないに楽しいのかい」

「だめだ、聞いてはだめだ。

「人形の城にいると、心まで人形になつてしまつのかい」

「ちがう、ちがうわ」

深い闇へと誘う言葉にぐらぐらと脳が悲鳴を上げる。だめだ、このままでは、逃げなければ。

「僕なら、君を楽にしてあげられる」

ふつりと、糸が切れた気がした。

「真実を見たくないなら目を閉じればいい」

「長く甘い夢を見る方法を教えてあげよつ」

「君はずつと我慢してきたんだね」

「さあ、忘れてしまえ」

繰り返される地獄の言葉は、驚くほどまっすぐにヴィオレーヌに届く。音もなく、彼女ははらはらと涙を流した。トライヴィスに恋をした、たつたそれだけのことで、何故こんなにも悩むのかわからなかつた。自分がひどく醜い気がして、ただもがいた。それを、この男は見抜いている。

「僕のために、働いてくれるね」

優しげな瞳に絆されて、気付けばヴィオレーヌはうなずいていた。胸の中でぐるぐると渦巻くどす黒い感情の正体など知らない。興味もなかつた。

「あなたのために、働きます」

さあヴィオレーヌ、田を覚ますのよ。わたしはもう、お人形ではないわ。

そうして哀れな女の瞳に、漸く光が宿る。物語の主役になれなかつた彼女は、深い憎しみと悲しみで染め上げられていた。

物語は深い因果によつて結ばれる。ヴィオレーヌとクロードの出

会いは、物語を加速させていく。その田は、人形に魂が宿つた田。

気持ちの昂ぶりと反比例するように、夜は更けていく。宵闇に染まった空には、信じられないほど大きな月。冷たく照らす白い星は、無機質であるにも関わらずひどく神経を揺らす。冷え切った瞳で辺りを観察しても、充満した濃い空気は甘く仄かに香る。まっすぐなはずの青年は、そして深いため息を吐く。

クロードはじっと目を閉じる。耳を澄ませば仲間たちの勢いのある空気が振動するのがわかる。彼らを呼び寄せたのは自分だとはいえ、ここにきて、わずかな迷いが生まれている。

皮肉なものだ

何故か、自分が悪者のような気がしてくる。彼らの邪魔をしているようで、妹の姿を思い描いては少しずつ迷いが大きくなる。これでは、駄目だ。

妹が失踪してから一ヶ月。ありとあらゆる手段を使い、真相まで近づいた。この街ではそこそこの権力をを持つボーマルシェ家の長男であるクロードが仲間を集めることは容易であつたし、反乱による戦いのせいで、仲間意識はより強固なものとなつていた。そんな彼の妹が、消えた。可憐で優しく気立てのよい娘だ。街の若者にどうては憧れの少女。彼女を探すことに協力する者など、数多くいた。あちこちを探し、それでもどこにもおらず、情報収集も隣国まで赴きしたというのに、少女は見つからなかつた。そして、数週間たつてから、老人たちがひそかに噂しはじめたのだ。

人形の城の呪いだわ

人形の城が呼んでいるんだ

彼らの怯えは確かなものだつた。聞けば、かつて、少年少女たちが失踪したことがあつたという。結局戻らず、街の人は人形作りを

生業にしていたエイヴォリー家のの人間を疑つた。それは単純に、貧しい街の中で豪勢な暮らしをしている彼らに対する妬みと不信感からくるものであった。また、エイヴォリー家はあまり街の人間とは交流しなかったのだ。頑なに否定する彼らをよそに、噂は広まるばかり。いつの間にかより忌み嫌われる存在になつたという。

「（しかし、僕は知つていた）」

エイヴォリー家に住みながらも、心優しい青年。血の繋がりはなくとも、確かにエイヴォリーの血を引く義血父のことを、とても尊敬していた。そんな彼をクロードは信じていたし、老人たちの古い噂など気にしたくはなかつた。

しかし。

どこを探してもみつからない妹と、数か月前までは妹とも仲良くしていたトラヴィス。それらが少しずつ繋がり、気付けばクロードさえもかつての友人を疑つてしまつていた。疑つてはいたものの、どうしても信じることができなかつた。そんな矛盾した心の中で、クロードは思考の迷路を彷徨い続けたのだ。そして。

「愛したのだろうか」

ぽろりと零れた疑問は、突撃前の熱い空気に焼き消される。

城で働く女　　ヴィオレーヌに話しかけたのは、半分偶然、半分ずつとわかつていていたことだつたのかもしれない。今までヴィオレーヌを街で見かけることは多々あつた。それでも訪ねなかつたのは、妹と友人を同時に失うことを心が拒否したからだろう。その迷いが最悪の事態を招いたことを、クロードはぼんやりと後悔する。

今夜。月が最も高くなつた頃。クロードは、仲間を率いて人形の城に突撃する。

「トラヴィス、残念だ」

ヴィオレーヌを通じ、ミュリエルの存在を確認。トラヴィスに説得を試みるも、拒否。誘拐と判断し、妹を救うべく、彼らは長年実態がわからなかつた城を落とす。

事実だけを並べれば、なんとも愚かしい。結局妹は城にいたのだ。

探し続けていた妹が、信頼し、迷い、最後まで疑うことを拒否した友人の元に。クロードや仲間たちは誘拐と判断していた。突如城に引きこもってしまったトラヴィスへの疑惑、老人たちの噂。禍々しい過去を持つた城の住人。疑うには材料がそろいすぎていた中の、事実。ミュリエルを心配し、救う。そんな劇的なチャンスを逃すはずもなく、己に酔つていく仲間たちは血氣盛んに突撃を望んだ。クロードも、悩みながらも、結局突撃を許可した。

それでも。

こうして、夜風にあたり月を見上げると。どうしても、考えてしまふのだ。

彼らが、愛し合っているのではないかと。

自分は邪魔をしているだけで、愛情によつてのみ、妹は友人の元へいつてしまつたのではないかと。

「……馬鹿馬鹿しい」

ずっと自分を慕い、大切にしてきた妹が、どこか遠くの世界へ行つてしまつたような気がした。兄として、常に妹の前に立つていたにも関わらず、いつの間にか妹の心が自分以外の元へ走つたことが、クロードにとつては信じがたいことだった。

嫉妬しているのか。そう思い、クロードは苦々しげに唇を噛む。

「クロードさん、準備が整いましたよ」

仲間の声。ぎらぎらとした熱気を持ち、獣のような目で正義を驕る男。

「いま、行く」

若干震えた声を隠すように、す、と手を伏せた。迷つてている場合ではないといふのはよくわかつていた。それでも、妹を、ミュリエルを想えば想うほど、クロードの中で迷いが大きくなつていいく。この瞬間ならまだ間に合つただろうか。そこまで考えて。

「クロードさん……！」

切羽詰まつた声がした。

「つづいた！？」

城を双眼鏡で監視していた男だ。何か、変化があつたのだろうか。
「塔です！ 一番目の塔に、トラヴィスさんが昇つていいくのが見えました！」

何故。

「…逃げる気か？ 情報が漏れたのでしょうか！」

自分を呼びに来た男が双眼鏡の男と会話している。

クロードは、ぼんやりと月を見上げた。ただ白い輝きだけを宵闇に発して、静かに我らを見下ろしている月。今宵は、いつもよりも大きな月だった。

情報が漏れたとしたらヴィオレーヌだらう。彼女の中にも、まだトラヴィスへの愛情があつたのだ。誤算、と言えばそうだが、どこかでわかつていたのかもしれないとクロードは苦笑する。

「クロードさん！ 指示を！」

愛、か

そんなものに踊らされた自分の、なんと愚かなことか。皆が愛情を持つて行動している中。自分を突き動かしたのは友人にに対する嫉妬。そんな醜い自分が、そして愛を引き裂こうとしている。けれど。

塔へ昇り、何をするつもりだ

嫌な予感だけが、じくじくと心を侵食する。

「……彼らは、死ぬ気かもしれない」

ぽろりと零れた咳きは、徐々に確信へと変わっていく。塔の下は城を覆う深い森。愛を引き裂かれようとしている二人は、友人であり、兄である自分を恐れ、死を選ぶのか。

「つ駄目だ！」

気付けば、叫んでいた。

何があつても、死んではならない。死んでしまっては、元も子もない。

愛のためだとか、そんな理由で、妹を失いたくない。

「準備も整つていて。突撃するぞ！」

その言葉を合図に、仲間たちは武器を手にした。

間に合ってくれ

それだけを想い、クロードは城を見上げる。莊厳な城は、深い森に守られ、神秘的な空氣で満ちていた。異形の者の城だと、そう直感する。

必ず、連れ歸る

そう決意すると、クロードは仲間の元へ駆けた。

クロードと仲間たちの思惑が違うことに、ここで気づいていれば、あるいは、悲劇は起らなかつたのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3142q/>

人形師の夢語り

2011年4月21日10時40分発行